

入居者インタビュー

～老人ホーム選びの体験を本に表す～

菅野様ご夫婦は入居し、もうすぐ3年目になります。菅野様のご主人様は小説家です。入居後、ホームを比較検討する際に集めた資料を見返したところ、経営者側の目線で書かれたものばかり、入居者本人が書いたものがないと感じ、なら自身が体験した事を伝えようと本を出版することにしました。その本が「老人ホームの暮らし365日」です。

金さえあればどうにでもなると思っていた

菅野様に老後をどう考えられていたか伺うと、奥様は「介護になった時、他人に家に入られるのは絶対に嫌だったし、自分がどんな扱いをされるのか不安、主人や娘に入居させられるのも嫌、元気なうちに自分の目で見て納得した所に入居したい」と考えていたそうです。

ご主人様は、「食事は近くのコンビニで調達すればいい、掃除が出来なくなったら業者に頼めばいい、夜中不安になってきたら家政婦を雇えばいい、動けなくなったら特養に入居すればいい、金さえあれば何とかできる、と今思えば傲慢な考え方をしていたな」と振り返ります。

「みじめだ」と言った友人の言葉がきっかけに

ある日、『娘に入れられた。ここを出たいから娘を説得して欲しい』と20歳年上の友人がご主人様を頼って連絡が来ました。会いに行くと、『どうせホームへ入居するのなら、自分の希望するところへ入居したかった。こんな所はみじめだ。ここを出たいとしか思わない。』と友人は嘆きました。ご主人様はその時、子供は親を中心には考えず、子供達の視点で探すのだろうと感じました。この話を奥様にすると、「そういう話もあるから、私は私の目で見て納得した所に入居したい」ときっぱり。この事をきっかけに、ホームへの入居を前向きに考えるようになったそうです。

入居者となった自分が伝えられる事

ご主人様は、入居を検討する段階から原稿を書き貯め、1年間の入居生活を加えて書き上げました。本の中に、「自立死」「孤独死」という内容があります。そのテーマを語りながら、「人に迷惑をかけずに死んで行くには、有料老人ホームが理想だと伝えたい」と話していただきました。「年をとるという事は誰もが避けられない事です。いつまでも若いと思っていてはダメ、悔いを残さない様、自分の老後は自分で始末すると考えて。その為には、気力や体力に余力がある間に決めなければ駄目、入居しなければと思う時は限界で遅いです。次世界で生きられると思う気があるうちに入居した方がいいですよ。お金を持っていても倒れたら何の役にも立たないですからね。」と。

現在は年末か来春の出版を目指し「80歳の終活レポート」を書き始められています。今後も菅野様が書かれる本が楽しみです。



食堂テラスのお花見会にて



お散歩ツアー・大仁・狩野川沿いを約5km歩きました。写真はかつらぎ山山頂にて撮影



(展望社：「老人ホームの暮らし365日」)